The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ハンガリー国立民俗アンサンブルの複層的ダイナミクス　――冷戦、イデオロギー、エージェント――
Author(s)	松井, 拓史
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87787
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　松井　拓史　）	
論文題名	ハンガリー国立民俗アンサンブルの複層的ダイナミクス ――冷戦、イデオロギー、エージェント――

論文内容の要旨

本論文は、1951年に社会主義体制下のハンガリーで結成されたハンガリー国立民俗アンサンブル（以下、ハンガリー語略称のMÁNEを使用）を研究対象とし、これまで「ソ連のアンサンブルをモデルとして結成された」「体制によって強制された伝統保存の一種」などと簡潔に触れられるばかりであったMÁNEの活動を各種資料を用いて検討することにより、社会主義イデオロギーと密接に結びついたMÁNEのイメージを相対化することを目指すものである。本文は序論、第Ⅰ部、第Ⅱ部から成り、第Ⅰ部では結成前史から現代までのMÁNEの活動を様式史的観点から概観し、第Ⅱ部では各種事例研究を行う。第Ⅰ部、第Ⅱ部はともに３章で構成されている。（Ａ４判１１４頁）。

序論ではまず、対象となるMÁNEの概要が説明され、社会主義イデオロギーと密接に結びついたイメージが作られた原因が示される。その後、MÁNEがハンガリーのフォークロア史研究および冷戦期の文化研究の盲点となっていたことを指摘し、最後に第Ⅰ部、第Ⅱ部の概要が示される。

第Ⅰ部第１章「舞台化されるフォークロア」では、はじめにMÁNE結成の前史として、レゲシュチェルケーセトやジェンジェシュボクレータ、アマチュアの民俗舞踊グループといった戦間期のフォークロア運動の展開と、第二次大戦後の共産党台頭とともにそうした運動が政治化していく過程を描く。その後、MÁNE初代芸術監督に就任したのラーバイ・ミクローシュが、小規模なフォークロアのアレンジメント作品から出発し、「民俗バレエ」という独自のジャンルを作り上げるための段階理論を提唱し、それが挫折してフォークロアのアレンジメントへと回帰していく様子を描く。

第２章「真正性を求めて」では、MÁNE３代目芸術監督に就任したティマール・シャーンドルがラーバイの様式を否定し、フォークロアの本来の姿をそのまま舞台上に乗せようとする制作方針に従って活動する時期を扱う。芸術監督就任当初、ハンガリーのフォークロア・リヴァイヴァルであるダンスハウス運動の主要人物の１人としてすでに名の知れていたティマールは、ラーバイと２代目芸術監督のレータイ・デジェーの硬直したスタイルを打破し、新しい方針を打ち立ててくれると期待されていた。しかし、ティマールが行った音楽面の改革（合唱団の廃止、合奏団の規模縮小）は、30年にわたってMÁNEを特徴づけてきた舞踊団、合唱団、合奏団の「三一致」を破壊することとなった上、フォークロアの本来の姿に対する形式的なこだわりはMÁNEの演目における内容的な不十分さを引き起こした。これらの理由によってティマールはアンサンブル内外から批判されるようになるが、そうした窮状を打破するための突破口を見つけることができず（見つけようとせず）、1996年に実質解雇となる。

第３章「ポスト社会主義の伝統保存」では、４代目芸術監督シェベー・フェレンツと５代目芸術監督ミハーイ・ガーボルによるパラダイム転換、すなわちプログラムの題材の幅を拡げ、ワールド・ミュージックなどハンガリーのフォークロア以外の要素を積極的に取り込むようになる転換点として、2000年のプログラム【太陽の伝説】を中心に扱う。このプログラムは、用いられる舞踊や音楽の素材という形式面の画期性だけでなく、ポスト冷戦期におけるハンガリーの新たなナショナル・アイデンティティを創り出そうとする点でも重要な作品であった。第３章は、第１章や第２章のような通史というよりも、【太陽の伝説】というプログラムに関する事例研究という側面の強いものである。

同じく全３章からなる第Ⅱ部「事例研究」では、社会主義イデオロギー、冷戦構造、メンバーの行動原理といった様々な要素からラーバイ期のMÁNEの活動を検討することにより、その実態を複層的に描き出すことを目指す。第４章「スペクタクル化される共産党の歴史的ナラティヴ」では、MÁNEが社会主義イデオロギーを喧伝するためのプロパガンダ装置であったという言説を検証するための事例として、1959年と1960年に制作された政治的な題材をもつ２つのプログラムを扱う。それぞれ、ハンガリータナーチ共和国（1919年のプロレタリア独裁体制）樹立40周年および祖国解放（1945年にソ連軍がナチス支配からハンガリーを「解放」した）15周年を記念したプログラムが、戦後のハンガリー共産党によって作り出された歴史的ナラティヴの筋書きをそのまま舞台化したものであり、さらにハイパーリア

リティとしての機能を獲得することによって、共産党一党独裁体制を正当化するという極めて政治的な役割を担わされたことを指摘する。そして、そのような体制側の試みが失敗したであろう理由を、受け手の解読コードという観点から説明する。第５章「彼らは旅するプロパガンダ集団なのか？」では、冷戦初期の海外公演、具体的には1952年のソ連・中国ツアーおよび1955年以降の西側ツアーを取り上げる。ソ連・中国ツアーに関しては、それが共産党のインターナショナルな連帯を文化的レベルで確認、強化するという文化外交的役割だけでなく、ツアーに参加したメンバーの体験談を国内メディアで発信することによって共産党一党独裁体制を正当化するという内政的機能をも担っていたことを指摘する。そして参加したメンバーたちにとっては、課せられた政治的任務を形式的にこなすことで得られる特権的利益（海外へ渡航できる、高い給与を得られる、等）が重要であったことを明らかにする。スターリン死後に始まった西側ツアーに関しては、ハンガリーに対する西側諸国のエキゾティシズムが冷戦期の東西分割状況と相まって、「鉄のカーテン」という記号を伴った冷戦的エキゾティシズムとして発露したことや、MÁNEがそうしたエキゾティシズムを逆手に取って、社会主義イデオロギーの「タブー」を犯すような宣伝戦略をとったことを指摘する。第６章「ジプシーをめぐるジレンマ」では、ハンガリーの音楽史において常に議論の的であり続けてきたジプシー楽師たちが、社会主義イデオロギー的には容認できない存在でありながらも合奏団メンバーとしてMÁNEに内包される際にどのようなレトリックが編み出されたのか、それと同時に、ジプシーという存在がMÁNEの演目において「他者」として表象されている場面を取り上げることで、「ジプシー」という概念が時にはハンガリーの一部とみなされ、時にはハンガリーではないとされるというダブル・スタンダードを明らかにする。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ 松井 拓史 ）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	伊東 信宏
	副 査	大阪大学　教授	輪島 裕介
	副 査	大阪大学　教授	永田 靖

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：ハンガリー国立民俗アンサンブルの複層的ダイナミクス ― 冷戦、イデオロギー、エージェント ―

学位申請者　松井 拓史

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　伊東 信宏

副査　大阪大学教授　輪島 裕介

副査　大阪大学教授　永田 靖

【論文内容の要旨】

本論文は、ハンガリー国立民俗アンサンブル Magyar Állami Népi Együttes（論文内では一貫してMÁNEと略記されるので、本報告もそれに倣う）を対象とする。MÁNEは1951年に設立された、舞踊団、合唱団、民俗オーケストラから成るフォークロアを提示する団体である。通常、ソ連の「モイセーエフ・アンサンブル」のような民俗舞踊団をモデルとして設立された、と考えられており、それ以上に詳細な研究はない。本論文は、このMÁNEを丁寧に概観し、冷戦期ハンガリーの文化的イデオロギーの中で再考しようとするものである。

全体は上演作品の様式を概観する第１部と、個別の観点からの事例研究を収めた第２部に分かれ、それぞれ３つの章から成る。

第１部第１章は「舞台化されるフォークロア」と題され、MÁNE 結成前史として、戦間期のフォークロア運動（ボーイスカウトの一種とも言えるレゲシュチェルケーセト運動や、都市への農村文化の提示であるジェンジェシュボクレータ運動）とそれに対する政治的介入プロセスを整理した後、初代芸術監督ラーバイ・ミクローシュ（1951年の設立から1974年まで在任）、および２代目芸術監督レータイ・デジェー（在任1974年から1981年）の時期を扱っている。ラーバイはトリオ形式という上演形態を編み出したほか、「民俗バレエ」という独自のジャンル目指していくつかの作品を制作したが、1960 年前後を境としてフォークロアの単純なアレンジメントへ「退行」してゆく。２代目芸術監督のレータイも過去の方針を踏襲するばかりだった。

第２章は「真正性を求めて」と題されている。1981 年に３代目芸術監督に就任したティマール・シャーンドル（在任1981年から1996年）が、ラーバイの様式を批判し、フォークロアのオーセンティシティを重視した制作を行った時期を扱っている。

第３章「ポスト社会主義の伝統保存」は、その後４代目芸術監督に就任したシェベー・フェレンツ（在任1996年から2002年）、５代目芸術監督のミハーイ・ガーボル（在任2002年から現在まで）の時期を扱い、彼らが行った変革の中で特に重要な、2000 年に制作された「太陽の伝説」という演目について論じている。

第２部に入り、第４章は「スペクタクル化される共産党の歴史的ナラティヴ」である。ここでは1959年、1960年に制作された政治的内容を持つ２つのプログラムが論じられた。これらのプログラムは、それぞれハンガリーのタナーチ共和国樹立40 周年、祖国解放15 周年という、ハンガリー共産党にとって極めて重要なイベントのた

めに制作されたものであり、共産党によって作り上げられた歴史的ナラティヴをほとんどそのまま舞台化したものであった。

第５章「彼らは旅するプロパガンダ集団なのか？」では、冷戦初期にMÁNE が行った海外ツアー（1951 年から 1963 年まで）が持つ単純ではない機能について検討されている。

第６章「ジプシーをめぐるジレンマ」は、冷戦や社会主義イデオロギーという枠組みでは分析できない事例として、MÁNE がジプシーという存在をどう扱ったのかが検討されている。

最後に論文全体を見通した「結語」が置かれ、本文は A4 判 114 頁に達する。加えて MÁNE のプログラムリスト、「太陽の伝説」の筋書き、そして参考文献表、合計 38 頁が付されている。本文中には図版、譜例が数点含まれる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文に関する口頭試問は、2022 年 2 月 10 日（木）に、およそ 2 時間にわたって実施した。

本論文は、冷戦期ハンガリーの国立民俗アンサンブルに関する個別研究として、十分な幅広さと奥行きを持っている。なにより、著者がハンガリー語に習熟し、これまでハンガリーでもあまり取り上げられてこなかった資料を精査して、自分なりの論述をまとめ上げたことは貴重である。コロナ禍のせいで当初の予定通りには進まなかった点もあったが、個人の日記やインタビューなどを調査に取り込めた点も重要である。

第１部の様式史記述では、これまで日本語では論じられたことのない問題（結成前史の「レゲシュチェルケーセト」「ジェンジェシュボクレータ」といった運動を取り上げたこと、第二次大戦終結から共産党一党独裁が確立されるまでの間の時期を丁寧に取り上げたこと、など）が浮き彫りになっていた。ただ少し奇異な感があるのは、1989 年の政治・経済の体制転換についてほとんど触れられていないことで、試問においてもこの点が問われた。ティマールの監督在任期間がその前後にまたがっており、この体制転換が MÁNE の歴史には表立って現れなかった、ということなのかもしれないが、おそらくその後の「太陽の伝説」における「ワールドミュージック」的路線は明らかに体制転換と関係しており、その意味についてはもう少し慎重に論じる必要があるように思われる。また、全体の６つの章、あるいは第１部と第２部をつなぐ包括的な議論が多少手薄であったことは否めない。

さらに、この冷戦期のフォークロアに基づくパフォーマンスが、同時期の東側諸国において行われていた様々な試み、例えばブルガリアのフィリップ・クーテフによる民俗的合唱団や、ポーランドの「マゾフシェ民俗合唱舞踊団」などとどのように似ており、どのように違うかということも今後の課題として重要である、という指摘があった。

別の審査員からは、論文の「目的」が序論に書かれているが、これがもう一段端的になるよう練り上げられるべきだった、という指摘もなされた。方法論としても、これまでの見方が単純すぎたことは納得できるにしてもそれを覆すだけでは別の単純さに陥ってしまうところがあり、個々のインタビューや証言を積み上げる中でその実態を浮かび上がらせるような描き方があるのではないか、との意見もあった。

しかし、これらの指摘は、本論文が十分な水準に達しており、本格的な議論を誘発する力を持っているものであるからこそなされたと考えられる。上記の質問、指摘について、学位申請者は的確に答えており、本論文の重要性は明らかである。

以上のような点から見て、本論文は、ハンガリー冷戦期の文化研究として重要な成果であり、博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。